



ムツゴロウの **娘** Part 1

畑 正憲



読売新聞社

ムツゴロウの娘よ Part・ワン

昭和五十七年十一月十五日 第二刷

著者 畑正憲

編集人 守屋健郎

発行人 加藤祥二

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一七一一 一〇一〇〇
大阪市北区野崎町八一〇 一〇五三〇
北九州市小倉北区明和町一一一 一八〇二

印刷 三陽社 製本 協和製本

定価 九五〇円

0095-703400-8715

落丁本、乱丁本はお取り換えいたします

目 次

忙しい一日	7
ラーメン・タイム	13
なんとなく大学生	20
天職を持てよ	27
記念的誕生日	33
プロダクションの時代	39
三つの数字	46
タレント志望	53
そうですね	59
変だ、変だ	65
教育論大流行	71
縁談の申し込み	77

異常低温、それでも春 83

中国に原始的人類、巨猿!? 89

今年も岩魚を釣ろう 95

クジラを愛する気持ち 101

歌・初体験、心臓がドキドキッ 107

いやー大変だったよ、俳優初体験 113

さまざまな「親と子のきずな」 119

クジラは「海のシンボル」 125

とうとうやっただぜ 131

作詞家なんて四苦八苦 137

父親は娘の料理を自慢したい 143

夢うつつのポートピア 149

肉に酔つてのオルゴールが最高 161

はなばなしい恋をしろ 167

うちのママは豪傑だ 173

旅の雨、小説よりも奇 179

《装丁・本文カット》はたあすみ

ム
ツ
ゴ
ロ
ウ
の
娘

よ

P
a
r
t
1

忙しい一日

何から話し始めようかな。

映画や音楽からというのもいいね。おれ、映画は好きだった。大学に入った最初の二年間は、映画ばかり見て暮していたっけ。田舎から東京に出て、他に遊びを知らなかったせいでもあったろうが、一と月の内に三十本見るのが普通だった。学校の授業なんてちっとも面白くなかったから、学期のはじめにちよろっと顔を出すだけで、あとは映画館の中にいたなあ。ようし今日は徹底的に見てやろうという日には、早朝割引のコヤにもぐりこんで、それからハシゴをして、一日に四本も五本も見ただものだ。

しきりに面白がっていたら、やがてシナリオを書くようになって、演出まで学んで、とうとう七年間も、映画でメシを食うようになったから不思議なものだ。だから映画について語り始めると、二、三十回、夜が明けてしまうだろう。

音楽について——などと言うと、お前はニヤリとするだろうネ。おれが、泣く子も黙る音痴であるのをよく知っていて、被害者でもあるのだから。

しかし、音痴だと言って馬鹿にしてはいけないぞ。音楽というのは、生きているものの中にどっしりと存在して、いろんな形で、生きることからみ合っているものだろうから。

いま、おれの机の上に何があると思う？『シヨスタコーヴィチの証言』という本だ。

シヨスタコーヴィチ！

知ってるよね。ソ連が生んだ偉大な音楽家だ。そしてまた、われわれの青春に、たくさんのメッセージを送ってくれた人なんだ。

よくきいたものだよ。渋谷に名曲喫茶というのがあってね、コーヒーを注文してシヨスタコーヴィチをリクエストして、息を詰め、マツチの棒を何本も何本もこまかく折りながら、真剣にきいたなあ。

いわゆる『進歩的』という学生たちは、社会主義や共産主義に憧れ^{そが}を持っていて、ソ連から届く学問や芸術に敏感に反応していたんだネ。でも、どこかいかかわしいものが多くて、その中で、唯一、本ものらしいのがシヨスタコーヴィチだった。

その彼が、スターリンの恐怖政治について激しい言葉でなじっているんだ。

おれは、読み進むうちに、おれたちの青春についていろんなことを思い出し、胸が熱くなっ

ている。マヤコフスキーなんかが出てくるんだよ。

ああ、マヤコフスキー！

ぜひぜひ、この詩人についても語っておきたいな。それから、革命の文学についても。

うんうん、スラブ民族の文学というのは、ちょっと違う味があるネ。ゴーゴリ、プーシキン、それからショロホフ。

ははは、耳にたこが出来ていると言いたそうだな。そうだった、お前とは、文学については山ほど語り合ってたつけ。

変なものだな、いく晩語り明かしても、まだまだ語り尽せず残っているんだものネ。

おれはいま東京にいてさ、夜が明けたらすぐ列車にとびのつて南へ行くんだが、東京へくる前の日、三月の二十日は素晴しかったよ。

一と月ほど外国にいて、お前と北海道でやっと合流し、一週間だけ一緒に暮したね。

二十日は、朝から馬に乗った。

お前がうまくなっているのにはびっくりしたよ。ごく自然な姿勢で、素直に乗っているのがよかった。馬の気持ちを尊重し、しかし、一つの形を忘れず、馬をきちんと支配しているんだから立派だった。

雪は残っていたけれど、水平線がかすんでいて、青空がうるんでいたつけ。春の最初の日と

いう感じだった。

遠乗りから帰ったら、キツネが車にはねられているというニュースが入って、そのまま馬で拾いに行った。

キツネは重態だった。ショックがきつすぎて、瀕死の状態だった。

止血などの処置をしないうちに、なんだかようすがおかしいんだ。

「聴診器！」

などとカッコよく叫んで心音をさぐると、心臓はほとんど停まっていて、ときどき思い出したように、コトコトと打っているだけだった。

そのうち、呼吸も停止した。

つまり、死んだんだ。

おれ、あきらめられずに、キツネの口に自分の口をあてがって、人工呼吸をやっていたわけ。誰かが胸を圧した*。

カンフルやアンナカの注射をした。

瞳孔は散大していて、肛門も開いてしまった。体温も下っていく。

でもね、おれ、やめられなかったんだ。キツネの口に口をつけているじゃない、するとね、鼻の丸さが舌にふれて、いとしいんだね、かわいいんだよ。

忙しい一日

二十分経ち、四十分経った。

疲れ果てて、もうやめようと思う。けどもやめられない。

生きているものがかわいくって、不覚にも涙がにじんできたっけ。

そして二時間後！

奇蹟きせきが起ったよね。

呼吸が戻り、心臓が打ち始めた。

あれはよかった。バンザイだった。

もう大丈夫ということになって、遅い夕ご飯を食べていたら、馬のニジがおかしいというニュースが入った。

駆けつけると、体中から、もうもうと湯気がたっていた。白い湯気のペールで馬が包まれているね。

要するに陣痛だった。仔馬が大きすぎて、のたうちまわっていたんだ。

それから一時間かかって、とうとう仔馬を



取上げたよね。

いい仔馬だったなあ。黒鹿毛で、丈夫そうな仔だった。

何やかやあって、ふと気づくと、居間でお前と二人だけになっていた。

お前がふと言ったつけ。

「わたしも好きなのね。ずっと一緒にいたんだから」

「あ、そうだ」

その時、おれは初めて気づいたんだ。キツネを処置している時も、お前がずっと横にいて、キツネの脚を持ってくれていたことを。そして、仔馬を拭いた時にも、お前の手があつたことを。

「生きてるって、とってもいい」

「そうだよね」

「地球って、とっても、とっても豊かな星なんだわ」

お前はしみじみとそう言ったな。それからベッドへ行き、おれは風呂に入った。忙しかったけれど、いい一日だったと、おれはすっかり満足し、洗い場で眠っちまったんだ。それでいま、ちよっぴりはなみずが出ているんだよ。生きているのは素晴らしいから、これからまとめてお喋りしようぜ。

ラーメン・タイム

「まだ学生の頃、T教授がちょっとちょっと含み笑いをして呼ぶんだよ。何だろうと行ってみると、数冊の古いスケッチブックがあっただ」

と、おれはラーメンをすすりこみながら、お前に話しかけた。

冬で、外は雪。新しく買った八十町歩の農場のどまん中に家を建てたので、隣近所というものがなく、怖いくらいに静かだった。

お前は、大学を受けるために帰宅し、明け方まで本など開いているようだった。

おれは書斎を十一時に出て、居間でぶらぶらし始める。お前もその頃、二階の自室から降りてきて、そろそろいきますか、などと言う。ラーメンをこしらえて夜食にし、それから何時間か話しこむのだ。

わが家のラーメンはとても辛いよな。大量のねぎをぶつ切りにして、チリソースに漬けてお

いてさ、三人分で井に一杯ぐらいの量だよ、それを出来上る寸前のラーメンにどさりと入れるんだけど、お前も辛いものにはツヨイよなあ。

お前、口をとがらして、ふうと息を吐き、先をうながした。

「スケッチブックをめくってみたら、動物の絵だった。見て、びっくりしたね、すごいんだよ、これが」

「どんな風に？」

「丹念で正確なんだ。生き写しという褒め言葉があるけれども、まさにそうだったね。細い線と点で、実に精妙に動物を描いていた。かの、鳥の絵で有名なオーデュボンさえしのぐ出来栄えだった。いま、あんな絵を描く人はいないな」

「エンピツの絵？」

「黒インクなんだよ。先の細いペンで描いてあるんだ。このところアメリカで流行っているスパーリアリズムを点描でやっているんだから価値があるよ。大体だね、マーケットはたくさんあるのに、動物画のすぐれた描手がいらないだよ、今は。さし絵みたいな消耗品をこなす人はいるけれどもね。そのスケッチブックにあるような絵をいま注文したら、一枚十万円以上するだろうね」

「ああ、おいしかった」